

# Laity Involvement in Catholic Church Buildings of Hong Kong Interpretation within Religious, Social and Political Contexts from the 1950s to 2015

福島, 綾子

<https://doi.org/10.15017/1654990>

---

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (工学), 論文博士  
バージョン :  
権利関係 : 全文ファイル公表済

氏名	福島 綾子			
論文名	Laity Involvement in Catholic Church Buildings of Hong Kong Interpretation within Religious, Social and Political Contexts from the 1950s to 2015 (香港のカトリック教会堂営繕における一般信徒参画 1950年代から 2015年の宗教・社会・政治的文脈における解釈)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	土居 義岳
	副査	九州大学	教授	谷 正和
	副査	福岡大学	教授	太記 祐一

### 論文審査の結果の要旨

この論文は、香港カトリック教区の 1950 年代から今日にいたる教会堂営繕活動に一般信徒が参画していることに注目し、その背景、仕組み、実例などを、既往文献と既往研究の少なさを補いつつアーカイブ調査や協会関係者へのインタビューによりたんねんに調査し、建築学、宗教学、社会史、制度史など広汎な文脈から論じたものである。

序論において文化財教会の保存に携わった経緯と、ラスキンの保存理論から、信徒が教会堂建設や管理維持にかかわることが無形文化財に相当することと、香港のまちづくり調査から香港人のアイデンティティ意識のありようが指摘される。

つづく本論は 4 部からなる。第 1 部はカトリック教会史における「信徒」概念の変遷を、19 世紀後半のカトリック・アクション、20 世紀初頭のイブ・コンガールらによる信徒神学、そして 1960 年代の第二バチカン公会議から、明らかにしている。

第 2 部では、信徒と社会の関係が分析されている。イギリス植民地時代からの政治や社会の変遷のなかで、教育制度、建築など専門家教育の充実などが独自の「香港人」を自称する人々を生み、それが信徒の母体となっている。また中国本土における宗教抑圧とは対比的に、香港では政治と教会が教育などをおして相互依存的ないわゆる契約関係にあること、を明らかにしている。

第 3 部は、香港の教会堂建築を様式史や建築類型学的な見地から通史的に記述しつつ、とくに政教契約関係を反映して、学校と教会堂が一体となった複合建築や、学校を週末にミサ・センターとして使うこと、が一般的となったことを浮き彫りにしている。

第 4 部は、1984 年に公表され 1997 年に実施された香港の本土返還に対応して、香港教区が信仰と組織を守るために建設活動を活発化させたという背景のもとになされた、信徒の営繕参画を調査し、分析している。(1) まず香港カトリック教区における営繕組織「教区建築及び発展委員会(Diocesan Building and Development Commission)」が、あたかも官庁における営繕部局のように、高度に組織化され、そこにエンジニアや建築家などの専門家一般信徒が役職などを務めていること、(2) この機構を活用して、聖職者、専門家一般信徒、そして小教区における一般信徒が、建設ディベロッパーとも共同して、高層住宅と教会堂からなる都市型複合施設「聖母聖衣堂」を建設した事例、(3) さらに専門家一般信徒が、専門職を活用して教会に貢献することを一種の「霊性」運動として自覚的に展開し、そのためのあらたな下部組織「天主教建築專業諮詢

小組(Catholic Building Professional Advisory Group)」を構築し、教会堂の管理維持がそのまま信仰のかたちであるという理念を表明した事例、を詳細かつ具体的に分析している。

結論として、香港カトリック教徒のアイデンティティの自覚は、第2バチカン公会議の理念、本土返還にともう信仰の危機意識、香港社会全体の成熟により香港人建設専門家の台頭といった複合的な要因からなるものであり、彼ら信徒は高度な専門家として、主体的に、教会堂建設にかかわるといふ宗教史においても特徴的な事例であり、信仰としての建設参画の例として、無形文化財的な価値があると見なしうるという結論があたえられた。

こうした分析と結論は、現代宗教におけるきわめて重要な局面を指摘するものである。近代は政教分離が原則であったが、21世紀はふたたび宗教の重要性が指摘され、ユルゲン・ハーバーマスはポスト世俗化を、島藺進は宗教の公共性を指摘している。そうしたなかにあつてこれまでには信徒の世俗的部分と思われていた専門職業の遂行そのものが、信仰の表現でもあるとするこの香港カトリック信徒の事例を発見し、歴史的、宗教的に分析し位置づけたことは、学問的にもまた世俗と信仰のありかたを考えるうえでも、きわめて重要な貢献であると指摘できる。

また研究史的にも、信徒参画そのものを対象とする研究はほとんど類例がなく、それにかんする最初の体系的なスタディとして意義深く、また信徒参画の現象そのものもますます一般的になることが予想されるので、先行例としての価値は大きい。

以上から博士論文(工学)の学位に値するものと判断した。